

## 非情の受身の状態の意味について

著者	張 莉
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	2
ページ	34-39
発行年	2017
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00001503">http://doi.org/10.15084/00001503</a>

## 非情の受身の状態の意味について

張莉（上海外国語大学）

### The Stative Meaning of Inanimate-Subject Passives

Li Zhang (Shanghai International Studies University)

#### 要旨

非情物が主語になる受身（非情の受身と略す）は古代語においては動作・作用が非情物に働きかけてくるという出来事の意味を表すのは稀であり、状態の意味を表すと言われる。

「状態」の意味が現代語においてどの程度の割合を占めるのか。現代語の非情の受身の「状態」の意味をどう捉えるべきか。本稿は、BCCWJを使い、述語動詞の構文形式を手掛かりに考察を行った。

現代語の非情の受身の意味は、「状態」に限らず、「出来事」、「反復」など様々である。非情の受身は本質的には非情物主語が動作主の行為によって物理的な影響を受ける意味を表し、「状態」などは「動作主の行為によって物理的な影響を受ける」という意味に「る・ている」などが加わって生じた文全体の意味である。

通時的に見ると、状態の意味の占める割合の変化も、現代語の非情の受身が古代、近代に比べて多様であるのも、文体や文章の特徴の変化、すなわち言語生活の変化によるといえよう。

#### 1. はじめに

日本語の受身に関して、主語の有情性により、有情物が主語になる受身（有情の受身）と非情物が主語になる受身（非情の受身）に分けられる研究が多い。後者に関して、非情の受身は非情物に動作・作用が及ぶ出来事自体を表すのは稀であり、その結果の状態を表すのが圧倒的に多いと言われる。本稿は、現代日本語の非情の受身の用例を観察し、その意味に注目し考察する。「状態」の意味が現代語においてどの程度の割合を占めるのか。現代語の非情の受身の「状態」の意味をどう捉えるべきかを検討する。

#### 2. 先行研究

非情の受身が表す「状態」の意味に関し、山田（1908）は以下のように述べている。

國語に於いては受身の文に二種の状態あり。一は文主が有情物なる時、この場合には文主が其の実際の主に直接に影響を蒙る場合にも、又間接に其れが影響を受くる場合に即所謂他動詞なる時も所謂自動詞たる時も共に受身の文をなしうるなり。而して非情物も擬人せられたる者は直にこの種の受身の文の主体となりうるなり。この種の文の主体は直接にも間接にも其の影響を受くることを自ら意識せるものと吾人が認むるものに限る。次は純然なる状態にして所謂他動詞に対する補充語たるものが、作用の影響を受くることを傍観者の地位より観察して傍観者の思想として之をあらはす場合なり。さる時は文主は非情物にても受身の文は構成せらるゝなり。非情物が文主に

して事実上の主の作用が文主に働掛くことを直接にあらはす如き受身の文は國語に存在せず。(山田 1908 : 380)

山田は有情の主語者自身が影響を蒙ることを意識しているのか、非情物が影響を受けることを傍観者の立場から観察して述べるのかによって、日本語の受身を有情の受身と非情の受身との二つにわけ、この二種のものは共に状態であり<sup>1</sup>、さらにそのうちの一種の非情の受身に関して、出来事を表す非情の受身は存在しないと指摘している。また、非情の受身の状態は、非情物に対する働きかけの部分を捨象し、その働きかけにより影響を受けたあとの結果に注目することから生じた意味であると思う。

近年の研究において、金水 (1991)、川村 (2012) は古代語の非情の受身は、述語動詞の「り」や「たり」が共起する状態性の表現であると述べている。

金水 (1991) はこの種の受身を「叙景文」と名付け、「限定された時空に存在する、ものの「現れ」を写し取る」特徴を持ち、「平安時代の仮名散文の非情の受身は、知覚された状況を描写する場面で用いられる場合が多い」と指摘している。川村 (2012) はこの種の受身を「発生状況描写」タイプと命名し、「他者の動作を受けたモノの身の上に起きている結果状態を描写している」と述べている<sup>2</sup>。

金水と川村によれば、非情の受身の「状態」の意味は、アスペクト局面の一種であり、動作の結果で生じた変化が持続する意味であるとのことである。

一方、張 (印刷中) は古代日本語の非情の受身の意味を検討し、金水と川村が言う「状態」という意味は非情物が物理的な影響を受けることを表す「～(ら)る」に、「り」や「たり」などの状態性の助動詞が加わって生じた、文全体の意味であると指摘した。非情の受身自体が表すのは、非情物主語が動作主の行為によって物理的な影響を受けるという意味であると主張した<sup>3</sup>。また、古代語では、「状態」を表す用法が多く現れるのが確かであるが、出来事自体を表すものも存在する。

筆者の古代語の非情の受身に関する主張は、現代語においても成り立つのか。現代語において非情の受身に現れる「状態」の意味をどう捉えるべきなのか、また、「状態」を表す用法がどの程度の割合を占めるのかを検討したい。

### 3. 用例収集と観察

現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言) を使い、「(ら)れる」をキーにランダムに 1000 例を抽出して観察した<sup>4</sup>。その結果、受身用法は 821 件で、その内、非情の受身の用例は 558

<sup>1</sup> 有情の受身の状態は、能動文との対照に基づいた意味である。能動文が「動作」である一方、有情の受身が「状態」を表す。

<sup>2</sup> 川村 (2012) は、いわゆる非情物主語の受身文は古くから存在することを認め、それらを三種類に分けて検討し、その内の「擬人化タイプ」と「潜在的受影者タイプ」を事実上の有情の受身としている。さらに、残りの一つを意味 (状況描写) と構文形式の特徴 (文末述語動詞が「(ラ)レタリ」など) を根拠に、受身から切り離し、「発生状況描写」タイプと命名して受身とは別種のラル形述語文として位置付けている。

<sup>3</sup> この観点は、山田 (1908) を引き継いだものである。山田 (1908 : 377) では、「非情物が文主たりとも現に吾人の見る所によれば確に非情物甲が乙なる者の影響をうけてあり…」と指摘している。

<sup>4</sup> 検索条件を「語彙素」に、検索対象を 2000 年代にした上で、「れる」「られる」をキーに短単位検索で二回検索する。ダウンロード可能な 20 万件の用例から、「れる」「られる」のそれぞれの用例数が (ら)れる全体の用例数にしめる割合により、ランダムに取り上げる。2000 年代にしたのは、1970 から 1990 年代までは「出版・書籍」、「知恵袋」、「ブログ」、「出版・雑誌」、「広報誌」、「教科書」、「出版・新聞」という 7 つのレジスターから用例が検索されていないこと、1970 年代の「図書館・書籍」、「韻文」からも用例が検索されていないことによる。

件（68%）、有情の受身の用例は 263 件（32%）である。

先行研究<sup>5</sup>を参照にし、非情の受身の使用傾向を示すと以下の図 1 になる。

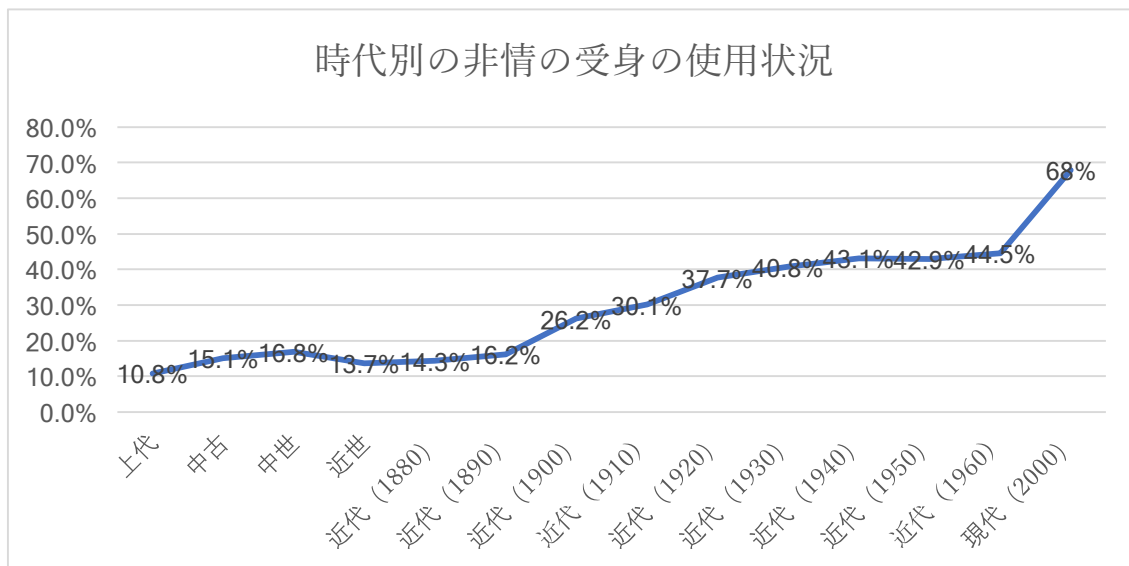


図 1. 時代別の非情の受身の使用状況

各時代の受身における非情の受身の平均使用率から、非情の受身の使用率が確実に増加し、特に 1880 年代を皮切りに、それ以降の増加が著しいことがわかる。これは、近代以降<sup>6</sup>、外国語の翻訳文体などにより、本来日本語になかったものが日本語に持ち込まれたことによると言われる（金水 1991）。現代語は近代と比べて飛躍的に増加したが、この原因は後に述べる。韓（2010）は近代以降（1880 年代から 1960 年代まで）の非情の受身は、状態を表すものから出来事を表すものへ拡張していることを主張している。

非情の受身の意味を状態と出来事の観点からみると、1880 年代は状態の意味の受身が 70%で、出来事の受身が 30%であるが、1960 年代になると、状態性の受身は 43.7%で、出来事性の受身は 56.3%であるとのことである。現代語の場合、非情の受身の意味はどのような発達が遂げたのか。現代日本語書き言葉均衡コーパスから抽出した 558 例のうちの文末述語用法（173 例）に絞って検討してみたい<sup>7</sup>。

詳しくは、述語動詞の構文形式を手掛かりに考察を行う。173 例の文末述語用法のうち、「～（ら）れている（た）」が 73 例（42.2%）で、「～（ら）れる」が 52 例（30%）で、「～

<sup>5</sup> 清水（1980）は中古から近代までの資料を調べ、中古、中世、近世、近代の平均使用率はそれぞれ 15.1%、16.8%、13.7%、37.2 であると報告している。中島（1988）は『万葉集』における非情の受身は 10.8%であると指摘している。韓（2010）は 1880 年代から 1960 年代までの文学作品と翻訳文献に現れる非情の受身の用例を年代別に観察し、文学作品の場合、1890 年代から 1940 年代まで割合が徐々に増え、1940 年代に 40%台に達したこと、1940 年代から 1960 年代までも 40%台であることを明らかにした。清水（1980）が指摘したように、各時代の各文献ごとに示された非情の受身の割合は、必ずしもその時代の平均値に近いものばかりではなく、文献ごとにかかなりの差が見られる。ここで示される時代ごとの割合は、それぞれの先行研究に示されるもの、複数の文献による平均値である。

<sup>6</sup> 韓（2010）では、「近代以前」は「近代」を含まない「近代より以前」の時代を、「近代以降」は「近代」を含む「近代およびそれ以降」の時代を指しているとするが、本稿もこの立場をとる。

<sup>7</sup> 受身が文に生起する位置による分布状況は名詞修飾節が 34%、文末述語が 31%、並列節が 15%、補足節が 10%、副詞節が 10%である。

「(ら)れた」が38例(22%)で、「～(ら)れつつある・～(ら)れていく・～(ら)れてくる」が10例(5.8%)である。以下で詳しく観察する。

- (1) (イベント)アウンサンスーチー女史の写真が掲げられている。OY03\_00051 1670
- (2) (神社)下に名前を書いたスリッパなどが奉納されている。 OY11\_08491 1290
- (3) 彗星の生命に関する問題は、千八百二十九年から千八百三十年まで Revue  
britannique の中でも真剣に論争されている。 PB14\_00062 69570
- (4) 1956年に関東のスズメの脾臓からエンセファリトゾーンが分離されている。  
PB54\_00260 3410

- (5) マヤの暦では2012年12月で世界は終わるとされている。 OY14\_20842 3790

(1)から(5)は述語動詞が「～(ら)れている(た)」のものである。(1)は非情物「写真」が誰かの「掲げる」という行為を受け、イベント会場のどこかにあるという意味、(2)は非情物「スリッパ」が誰かの「奉納する」と言う行為を受け、神社のどこかにあるという意味を表す。(3)が表すのは非情物「問題」がある期間帯に継続的に「論争」という行為を受けることで、動作の繰り返しの意味である。(4)は1956年という過去に実現した事実を、非情物「エンセファリトゾーン」に注目して現在と結びつけて記述し、経験記録の意味を表している。(5)は「とV(ら)れている」によって表される「一般的認識」を表し、反復の意味である。

(1)、(2)の「～(ら)れている(た)」に代表されるのはいわゆる状態の意味で、この種の用例は42例(24.3%)ある。

(3)～(5)の「～(ら)れている(た)」に現れるのはいずれも状態の意味ではない。(3)はいわゆる出来事の意味(動作・作用が非情物に働きかけてくる意味)といえるが、(4)、(5)はいわゆる出来事の意味とは言えないであろう。したがって、現代語の場合、非情物の受身の意味を状態と出来事という二つに分けて考えることは妥当ではないといえよう。

- (6) …受賞者に賞状が手渡されました。 OP92\_00001 88750
- (7) 基調講演と各分野で活躍する市民による討論会が行われました。 OP03\_00002 600

(6)、(7)は述語動詞が「(ら)れた」のものである。それぞれ誰かの「手渡す」という行為による非情物「賞状」の位置や所属の変化の発生、「市民」の「行う」という行為による非情物(こと)「基調講演」と「討論会」の開催(事の生起)で、両方ともいわゆる出来事の意味である。

- (8) Pキーを押しながらクリックすると、中心から長方形が描画される。  
PB3n\_00016 19940
- (9) 風水害はそれぞれの場所の地形や地理的な条件にも大きく左右される。  
OP19\_00003 4880
- (10) 「K I D' S エコロジーコンサート二千八 i n 南箕輪村」が開催される。  
OP53\_00001 27490

(8)～(9)は述語動詞が「～(ら)れる」のものである。(8)は「クリックする」という前項条件が達成されると、非情物「長方形」が何者かの「描画する」という行為によって現れるという事態の恒常的な発生の意味を、(9)は非情物(こと)が「地形や地理的な条件」により恒常的に生起する意味を表す。(10)は非情物(こと)「コンサート」が将来に生起する意味を表す。

#### 4. 「状態」の意味をどう捉えるべきか

現代語における個々の用例を観察することによって、非情の受身の用例は、述語動詞の構文形式により、「状態」、「出来事」（一回的と継続的）、「経験記録」、「反復」など様々な意味を表すことがわかる<sup>8</sup>。これらの意味を有情の受身の本質の意味として先行研究で提示される「影響」（「利害」や「被影響感」）などの意味のように、より一般的な意味に導くことはできないだろうか。

そこで、現代語に関して、古代語の非情の受身を分析した張（印刷中）と同じ認識を取る。すなわち、非情の受身は、非情物主語が動作主の行為によって（物理的な）影響を受ける<sup>9</sup>という意味を表す。「状態」も「出来事」も、また他の意味も、あくまで「動作主の行為によって物理的な影響を受ける」という意味に「る」や「ている」などが加わって生じた文全体の意味としか言えない。

そこで、なぜ古代語の場合では圧倒的に多数を占める状態の意味が、近代の始めころになると70%という割合になり、近代の終わりころになると43.7%、さらに現代の場合は24.3%という減少の道を辿ってきた一方であるのか、また、なぜ現代語の場合、「出来事」以外の意味も多く現れているのかが問題となってくる。

三浦（1973）は和文では、状態性の表現をする場合が多く、出来事の表現が少ないが、和漢混淆文では、状態性表現よりも出来事の表現が多く見られると述べている。さらに、金水（1991）は中古仮名散文で非情の受身が状態の用法に偏っているのは、文章的な発想から、日常的な言語生活のレベルに止まり、ものに対してその場その場の現れが認識されれば足りるためである一方、非日常的な生活レベルになると、「もの」は個体か総称的な種と見られ、「もの」を中心にその履歴や属性を語る必要性が生じてくると主張している<sup>10</sup>。

状態の意味の受身の減少は、観察された事実である。状態の意味が全体に占める割合の変化も、現代語の非情の受身が古代に比べて意味が豊富になるのも、こういった文体や文章の特徴の変化、すなわち言語生活の変化からくるのであろう。

詳しくいうならば、古代は言語生活が日常的なレベルに止まり、人間が日常生活の中心である。言語生活は人間をめぐる日常的なものに偏るため、叙情的かつ主観的な人間の関心の強い韻文が多い。物に対して、その場その場の現れを状態の意味として述べればいいので、状態の意味が圧倒的優勢である。

一方、近現代になると、言語生活は非日常的なレベルに広まり、日常生活において物の存在も重要になる。言語生活の射程は人間をめぐる日常的なものだけでなく、抽象的・一般的で非日常的なものに広まっているため、叙事的かつ客観的な物や事にも関心が増え、随筆や散文、また説明文などが多出している。物に対して、それを中心に、それをめぐる出来事の叙述や、恒常的事態の叙述も必要となってくるので、状態の意味が全体に占める割合が減り、出来事や恒常的事態の意味が増えるわけである。

また、図1に示したように、非情の受身全体が近代以前は概ね10%台の使用率を保ち、近代から急激に増えたのも、明治維新により、西洋の文化が日本に吹き込み、言語生活が変化したことと密接な関係がある。

<sup>8</sup> 紙幅のため、「～（ら）れつつある・～（ら）れていく・～（ら）れてくる」の用例を取り上げていないが、いずれも変化の意味を表す。

<sup>9</sup> これはあくまで典型的な意味であって、益岡（2000）での「属性叙述受動文」に関して、さらに検討する必要がある。

<sup>10</sup> 意味の拡張に関しては、状態を表すものから出来事を表すものへというルートを辿っている（韓2010）。動作主の存在の有無などが拡張において重要な役割を果たしているが、それをめぐる議論は今後の課題とする。

なお、現代語の場合、非情の受身は60%台（近代以降の40%台から見ると高すぎるとも言える）の使用率を占めるのは本研究が書き言葉均衡コーパスから用例を集めたことによる。この延長上で考えるならば、古代や近代などは残されたテキストが文学作品に偏っているため、それにより先行研究で示された使用率も実際に現れていたであろう割合よりは低くなっていると推測される<sup>11</sup>。

## 5. まとめ

問題提起を振り返って見れば、現代語における非情の受身の意味は、古代語と違って、「状態」にかぎらず、「出来事」（一回的と継続的）、「経験記録」、「反復」など様々であることがわかった。

現代語の非情の受身は本質的には非情物主語が動作主の行為によって物理的な影響を受ける意味を表し、「状態」などの意味は「動作主の行為によって物理的な影響を受ける」という意味に「る・ている」など助動詞が加わって生じた文全体の意味である。

通時的に見ると、状態の意味の占める割合の変化も、現代語の非情の受身が古代近代に比べて多様であるのも、文体や文章の特徴の変化、すなわち言語生活の変化からくるのである。

## 参考文献

- 奥津敬一郎 (1983). 「何故受身か?—<視点>からのケース・スタディ—」『国語学』132, pp.65-80.
- 川村大 (2012). 『ラル形述語文の研究』くろしお出版.
- 韓静妍 (2010). 「近代以降の日本語における非情の受身の発達」『日本語の研究』6:4, pp.47-61
- 金水敏 (1991). 「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164, pp.1-14.
- 清水慶子 (1980). 「非情の受身の一考察」『成蹊国文』14, pp.46-52.
- 張莉 (印刷中). 「古代日本語における非情の受身の意味」『東京大学言語学論集』
- 中島悦子 (1988). 「『万葉集』における「非情の受身」」『日本女子大学大学院の会誌』7, pp.1-11.
- 宮腰幸一 (2012) 「日本語結果表現に関する予備的考察」『論叢現代語・現代文化』9, pp.1-43.
- 益岡隆志 (2000). 「叙述の類型から見た受動文」『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 三浦法子 (1973). 「平安末期の受身表現についての考察」『岡大論稿』創刊号, pp.129-143.
- 山田孝雄 (1908). 「受身につきての論」『日本文法論』宝文館.

## 関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

<sup>11</sup> 同じ書き言葉でも、韓 (2010) と同じように文学作品から用例を収集するならば、60%台よりは低い使用率が得られるであろう。奥津 (1983 : 79) は文体の違いと受身文の関係をとり上げ、以下のように指摘している。話しことばと書きことばでは、書きことばに受身文が多く現れる。また、同じ書きことばでも、評論・随筆のような抽象的な議論の入るものの方が、具体的なできごとを叙述する物語り、小説の類よりも受身文、特に非情の受身が多く使われる。個人的な文章に対する公的な文章も同様である。